



## 書評「話題の本」

### 薬師寺克行『外務省：外交力強化への道』（岩波新書）

神田外語大学教授 和田純

「改革」が連呼される昨今だが、「そういえば、あれは本当に改革されたの？」と疑問に思うことも少なくない。典型の一つが「外務省改革」だろう。

あの競走馬とともに汚職に走った役人は実刑となり、田中真紀子大臣は次官と刺し違え、鈴木宗男議員は437日もの拘置の後に立候補を断念した。改革は進んでいるということなのか。

それにしては、北朝鮮との交渉は精彩を欠き、イラクの戦後復興では無理が目立ち、FTAでは後塵を拝している印象は拭えない。加えて、外務審議官への個人攻撃や、罷免されたという大使の発言がまたまた耳目を集めている。にもかかわらず、外務大臣は続投だ。

ここ数年の外務省を見ていると、改革とは形をなさないもので、その成果は外交のあり方にまでは及ばないものかと憂鬱になる。組織の襟をただし不正を無くすのは、改革以前の当たり前なことではない。外交そのものを変えるのでなければ、改革の名に値しないことは自明だ。根本的な軸のずれを感じて久しいが、本書はその構造的な課題を平易なことばと直近の事例で解明してくれる。

日朝交渉の挫折、変貌する日米同盟、問われた外務省の体質、新外交を阻む冷戦の残滓、内交の時代、という目次立てを並べただけで、著者の目線が外交のあり方の本質を問うものであることが読みとれる。スキャンダルが先導する安易な外務省批判でなく、著者が問うのはまさに「日本の外交力」である。

重要問題に関する意見を統合し、トップが最終決断を下して、横断的に連携して対処するシステムの欠如。日本の主体性を失いつつある安全保障政策。国民の理解や共感を得ることを忘れた怠惰。冷戦期の体質のままで、未熟な機動的政策転換能力。「毅然とした外交」を求める危険な風潮。どの指摘も、経済や政治だけでなく外交においても「空白の10年」が作られてしまったことを明らかにして、重い。

本書の最後では、「外交力強化への道」として官邸機能の強化、本物の政治主導の実現、外との対話を取り上げられ、具体的な改革の提言がなされている。国民的にもっと論議されてよいものだ。特に、外との対話で指摘される「パブリック・ディプロマシー」と「パブリック・インテレクチュアルズ」の不備は、とりわけ日本では空白の部分と言え、概念の肉付けも含めて活発な論議が求められる。